令和６年度　体育研究計画

津田沼小学校 体育の基本方針

津田沼小学校では，体育研究の究極的な目標を「体育を中核とする人間形成」としている。これは，長年にわたって本校が，体育の本質を「身体活動を通しての人間形成を目的とした教育の営み」と捉えていることによるものである。よって，私たちは体育を通して「全人的人間形成」を目指している。

研究計画作成上の基本方針

１　研究主題は，「仲間と共に高め合う体育学習」とする。また，研究副主題を「自分のめざす姿に向かって課題解決できる児童の姿を目指して」と設定し，研究を進めていく。

２　児童一人一人が自分のめあてに向かって仲間と共に高め合い，技能を向上させていけるよう，一人一人のめあてや課題に沿った単元計画や指導・支援の仕方を工夫し，仲間と共によりよく課題を解決していけるよう研究を進めていく。　※詳細ｐ4～

３　研究領域は，「器械運動」を中心に取り組んでいく。

令和６年度　研究主題

仲間と共に高め合う体育学習

～自分のめざす姿に向かって課題解決できる児童の姿を目指して～

Ⅰ　主題について

１　主題の設定理由

（１）社会の要請から

これからはSociety5.0という予測困難な時代の児童をめぐる状況を考えるときに，**児童一人一人が生涯にわたって心豊かに，主体的に，創造的に生きていくことができる資質や能力を身に付ける必要がある。**そのため，小学校の時期から児童一人一人が自分の思いや願いをもち，持続可能な社会の担い手として，人間・自然・社会・文化など様々な対象に進んで関わり，いろいろな価値ある課題や意図を見出し，それらを解決したり，実現したりする資質や能力の育成を重視することが大切である。**そのような資質や能力は，児童がよりよい社会を自らの手で築いていく力ともなり，ウェルビーイングの獲得にもつながる。**

このような考えから，児童一人一人のよさや可能性を生かすことを根底に据え，基礎的・基本的な知識・技能の習得，思考力・判断力・表現力，学びに向かう人間性などの能力の育成をめざして学習を進め，学ぶ意欲を高めていくことが求められている。

（２）学習指導要領における学校体育及び体育指導のあり方の追究から

学習指導要領に「学校の教育活動全体を通じて適切に行うことにより，健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努める」，体育の目標として「体育や保健の見方・考え方を働かせ，課題を見付け，その解決に向けた学習過程を通して，心と体を一体として捉え，生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す」とある。さらに，

①その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに，基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
②運動や健康についての自己の課題を見付け，その解決に向けて思考し判断するとともに，他者に伝える力を養う。
③運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し，楽しく明るい生活を営む態度を養う。

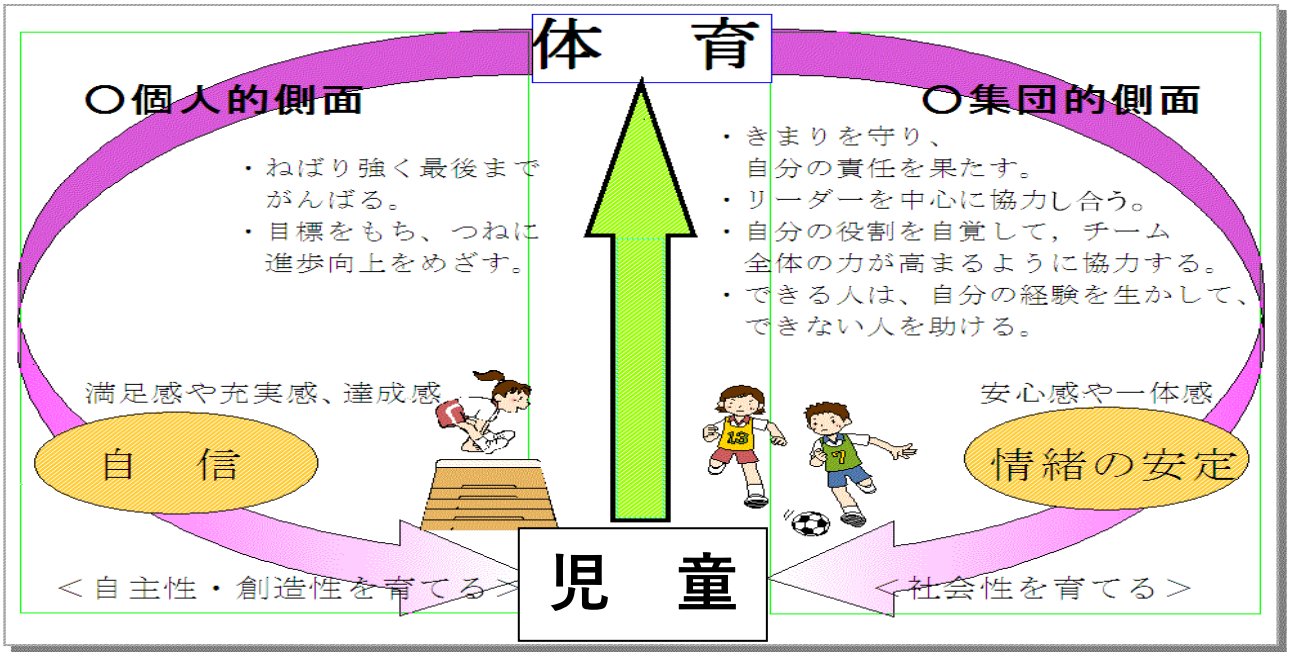
とある。この目標は，①～③の目標が相互に密接な関連をもちつつ，体育の究極的な目標である，生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指すことを示している。また，**その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全についての理解と，基本的な動きや技能を身に付けるようにする**「知識及び技能」，**運動や健康についての自己の課題を見付け，その解決に向けて思考し判断するとともに，他者に伝える力を養う**「思考力，表現力，判断力等」，**運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し，楽しく明るい生活を営む態度を養う**「学びに向かう力，人間性等」の三つの目標が相互に密接な関連をもっていることを示すとともに，体育の重要なねらいであることを示した。

（３）体育の本質と人間形成から

体育の本質とは，身体活動による人間形成を目的とした教育の営みであり，児童一人一人がもっている可能性の全体的実現のために欠くことのできないものである。体育学習では，児童が自分のめあてをもち，そのめあてに向かってねばり強く取り組み，「分かった」「前より上手になった」「できるようになった」などの達成感を味わうことで自信が生まれ，それが繰り返されることで自主性や創造性が育まれていく。そして，**きまりを守る，リーダーを中心に協力し合う，互いに励まし合う，認め合うなどの肯定的な集団的学習活動を通して，体がふれ合い，心が通い合い，互いに安心感や一体感を抱き，情緒が安定して児童一人一人に社会性が育まれていく。**

また，心身の健康は生きることの基礎となるものであり，これを土台としてもろもろの文化が生み出されている。このように，人間形成に重要な役割を担っているのが体育である。

＜資料１　体育の本質と人間形成＞



（４）本校の半世紀にわたる研究のあゆみから

昭和２９年，当時の校長，高橋誉富先生は当時の本校の児童について，観察と調査に基付いて実態把握を行った。そこから見えた課題から，

①都市化によって奪いとられた美しい自然の環境をできるだけ児童に返し与えたい。

②豊かな愛情の中で児童を生活させたい。

③のびのびとした健やかな心身をつくるために，体育指導をしっかりとりあげていきたい。

という三つの願いを生み出したのである。そして，この三つの願いが津田沼小の教育の“ねがい”であり，研究に取り組んだ発端である。この願いを具体的に実践に移したのが翌昭和３０年からであり，以後，時代が変わり人が変わっても研究を継続して今日に至っている。

半世紀にわたって取り組んできた本校の研究は**学問研究ではない。現場の生きた児童を中心に据えた，児童にわかる指導法の追究であり，児童の喜びや感動を育てる学習指導のあり方の追究であり，仲間づくりを通して連帯感を高めることを通した人間形成のあり方などの『累積的実践研究』**である。

	直近３年の研究主題・副主題
令和３年度	知識の定着，技能・体力向上を促す体育学習～関わりを通した基礎体力の向上～
令和４年度	仲間と共に高め合う体育学習～関わりがうまれる手立ての工夫を通して～
令和５年度	仲間と共に高め合う体育学習～思考をはたらかせる学習の中で，児童の様々な関わりがうまれる手立てを講じて～

（５）学校教育目標から

「心豊かにたくましく生きぬく児童の育成」これが本校の学校教育目標である。また，望ましい児童像として「思いやりのある子（心）・考える子（知）・たくましい子（体）」を掲げている。

本校では心身の発達期にある児童の教育を鑑み，人間形成に果たす体育の本質を活かし，体育を中核とした教育活動をするために学校経営の中に体育を正しく位置付けることに努めている。また，体育を中核とする教育計画が人間形成に果たす意義を深くわきまえ，体育と各教科・特別活動・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・日常生活等との調和的教育活動の推進に努めている。

（６）児童の実態から

本校には，長年にわたって築きあげられてきた伝統がある。それは，**人間的ふれ合いを基盤に，身体活動による人間形成を目的とする教育の営みの重視**であり，まだまだ不十分なところは目立つが，**規律正しさ・ねばり強さ・真剣に取り組む（黙働）・友だちにやさしい**などの児童の姿である。それらは，よき伝統として受け継がれ，今では校風となっている。

一方，本校の児童にも，運動に興味をもち活発に運動する児童とそうでない児童の二極化傾向が見られ，運動を活発にする児童には特定の運動を行う「局化現象」も見られるようになってきた。また，生活習慣の乱れやストレス及び不安感が高まっている現状が見られる。こうした児童が，生涯を通じて自らの健康を適切に管理し改善していく資質や能力の基礎を培うため，健康の大切さを認識し，健康なライフスタイルを確立する観点に立った学習が求められている。**児童の心身ともに健全な発育・発達を促す**ためには，心と体を一体としてとらえ，運動領域と保健領域をより一層関連させていく必要がある。これらのことを踏まえながら，本校に受け継がれてきたよきものをその大本に立ち返ってもう一度見直し，その教育的価値を再認識すること，原点に立ち返って心新たにして児童と共に歩み続けていくことで，伝統が継続し発展が期待されると考えている。

2　主題とめざす子どもの姿

【学校教育目標】

学　校　教　育　目　標		
思いやりのある子ども（心）	考える子ども（知）	たくましい子ども（体）

【研究主題に迫るための仮説とめざす子ども姿】

【主題】仲間と共に高め合う体育学習

【副主題】～自分のめざす姿に向かって課題解決できる児童の姿を目指して～

＜　仮　説　＞

児童一人一人が自分のめざす姿に向かって活動ができるように単元計画を工夫し，課題解決につながる指導・支援を充実させたり，効果的な関わりを促したりする手立てを講じれば，**自身のめざす姿に向かって，自分で考えたり仲間と試行錯誤したりする力が身に付くだろう。**

＜研究成果としてのめざす子どもの姿＞

自身のめざす姿に向かって，自分で考えたり仲間と試行錯誤したりする児童

部　会	＜各部会のめざす子どもの姿＞
特別支援	①教師の支援を受けながら一人で運動できる児童 ②自分で考えたり，気付いたりしたことを仲間や教師に伝えることができる児童
低学年	見合い，伝え合う活動を通して，自分のめあてに向かってくり返し取り組む児童
中学年	自分の課題を見付けたり，課題解決に取り組む内容を選んだりする中で，知識や考えたこと，気付いたことを伝え合うことができる児童
高学年	課題に対しての自分の考えをもったり，仲間と試行錯誤したりするとともに，解決する場や方法を伝え合う児童

3　研究の重点

学習指導要領「ア　目標の改善」
課題を見付け，その解決に向けた学習過程を通して，心と体を一体と捉え，生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す。

に基づいて考え，めざす子どもの姿の，「自分のめざす姿に向かって，自分で考えたり仲間と試行錯誤したりする児童」を照らし合わせ，今年度は「児童一人一人が自分のめざす姿に向かって活動ができるように単元計画を工夫し，課題解決につながる指導・支援を充実させたり，効果的な関わりを促したりする手立てを講じれば，**自身のめざす姿に向かって，自分で考えたり仲間と試行錯誤したりする力が身に付くだろう。**」を仮説として設定して研究を進める。資質・能力を示す３つの柱のうちの「思考力，判断力，表現力等」を重点に探究していくことで，「知識及び技能」「学びに向かう力，人間性等」が関連して高まっていけるようにしたい。

４　主題に迫るための重点

（１）単元計画の工夫

〇単元を３つの過程に分ける。

〇はじめ：全体で共通課題に取り組む学習が主の時間

〇なか　：一人一人の課題解決やめあてに向けた学習が主の時間

〇おわり：はじめの自分と比較して，伸びを見付けることが主の時間

【単元計画のイメージ図（一例）】　※本時は太枠で囲む

はじめ		なか				おわり
1	2	3	4	5	6	7
〇オリエンテーション 〇課題発見	〇全体で共通課題に取り組む学習 ・技のポイントの理解 ・周辺運動の行い方，ポイント ・学び方を学ぶ ・基礎的な技能の習得　　等			〇一人一人の課題解決やめあてに向けた学習 ・技を習得する。 ・技の精度を高める。 ・組み合わせ技に取り組む。 ・一度難度を下げる。 ・はじめからの伸びを見付ける　等		

【イメージ図の解説】

① 「はじめ」では，オリエンテーションとして学習の約束や周辺運動のやり方を確認したり，全体でめざす技に対しての個人（グループ）の課題を見付けたりする時間とする。

② 「なか」では，「はじめ」で学んだことや得たことを生かしながら，思考をはたらかせながら個人のめあてやめざす姿に向かって取り組む時間とする。技を習得する，高める，次の技に挑戦する，一度難度を下げる，……，といった一人一人に合った取り組みができるようにする。

③ 「おわり」では，今までの学習を振り返り，はじめの自分と比較して伸びを見付けたり，友達の伸びや頑張りを認めたりする時間とする。

（２）課題解決学習の指導・支援の充実

◎自分のめざす姿に向かうための課題解決学習の流れ

①主運動をやってみる　②自分の実態を把握する　③課題解決に向けて練習方法を選択したり，アドバイスを受けたりする　④選択した方法，アドバイス等を元に様々な練習をしてみる　⑤もう一度①と同じ運動をしてみる　⑥実態を把握し，うまくいかなかった場合，課題解決のための方法や取り組むべき課題を修正する。うまくいった場合，質を高められるようにする

＜課題解決学習の具体的な支援の手立て＞

学びの当事者は児童であり，教師は児童の学びの支援者・伴走者という立ち位置で，児童一人一人の学びをサポートする。

〇発問の工夫

【児童の考えるきっかけとなる発問】

〇比較する　〇選択する　〇順番を決める，順位を付ける　〇分類する　〇関連付ける　〇見通す，予想する　〇別の視点から捉える　〇理由付けをする

〇スモールステップ表
　めざす姿や目標を細かく分け，かんたんな内容から少しずつ達成していくための一助となるように，自身や仲間の課題を把握したり，次にめざすステップを確認・選択したりすることができるようなものを作成する。「運動遊び」の領域では，やりたい遊びを選んだり，遊びの質を高めたりすることができるようなものを作成する。
〇フローチャート
　児童がいだく課題意識に対して，場の選択や練習方法，効果的な関わりなどが児童自身で選択できるようなものを作成する。
〇技の系統表
　技と技のつながりがわかるものを作成，提示する。その中から児童一人一人がめざす姿を選択できるようにする。「運動遊び」の領域では，遊びの質を高められるようなものを作成する。
〇場の設定
　児童の課題や実態に応じて場の設定を工夫する。その場で練習することの効果などを提示し，児童自身で場を選んで練習することができるように支援をする。「運動遊び」の領域では，高さや幅などの条件を変えることで，自然と遊びの選択肢が広がったり質が高まったりするように工夫する。
〇ヒントカード
　技のポイントや練習方法，見合いや補助の仕方などが書かれたものを作成し，児童がそれを見て課題解決学習に生かせるようにする。
〇技の連続図
　イラストや写真を使った技の連続図を提示し，その技の流れやポイントとなる動きがわかるようにする。課題解決学習や関わりの基盤となる技についての知識が確実に定着できるようにする。

（３）効果的な関わりの促し
　児童自身で必要な関わりを選択し，課題解決に生かせるように，児童が効果的な関わりをもてるように教師が促す。
〇グルーピング
　学習の過程や内容に応じた効果的なグルーピングを行う。指導の個別化をねらう単元前半では異質グループを組んだり，学習の個性化をねらう単元後半では，その場で等質グループを組めるように仕組んだりする。状況に応じて２人組や３人組，４人組等で行わせる機会を組み合わせる。
〇教師の介入
　教師は常に全体を見渡して状況を把握し，肯定的な働きかけを意識する。その際，「いいね」「うまいね」などという肯定的なフィードバックや，「もっと〇〇するともっとよくなるよ」といった矯正的フィードバックを行う。
〇学び合いの仕方
　高め合うための素地を，単元はじめに教師主導でしっかりと教え込む。見合いや補助の仕方，声掛けや話し合いのやり方を伝えたり提示したりする。
〇器具・用具の選択
　すべての児童が，同じ土俵で考えたり，自分に合った練習や遊びをしたりすることができるように活動の場や用具を工夫する。児童の課題や実態を把握し，効果的な場や練習方法，器具・用具を選択できるように声掛けや支援をする。
　考えられる支援……高さや幅を変える，赤台，体操棒，壁，セーフティマット，スポンジ棒，
　　ケンステップ，回転補助具，ICT 機器やタブレット端末の利活用　など

５　検証方法について
①学習カードの修正・検証
　児童の考えや気付き，変容がわかるような学習カードの作成
・学校全体である程度統一された型を作成し，発達段階や学級の実態に沿ったものにする。
・低，中，高学年が系統性のある学習カードを活用して，児童の思考の変容や修正をしている学習状況が記録として残るようにし，学習状況を把握する。

・単元のはじめ，中，終わり等で書き，思考の流れや変容が実感できるようにする。
※発達段階に応じて，どの児童も発問に対して自分の意見を書ける形式

②アンケートによる検証（成果，思考，関わり中心）

・単元開始前（０時間目）から形成的授業評価をもとにした本校独自の意識調査を行う。また単元を通して毎学習後に実施する。

・児童に身に付けさせたい技能や運動感覚について，単元開始前と単元終了後に記述（発達段階に応じて）の調査を行い，変容を見取る。

③技能調査による検証

・単元開始前と単元終了後の技能実態調査→学習前と学習後の数値の変化を見取る。

Ⅱ　研究方法及び組織

１　研究の方法

（１）理論研究について

①年度初めに，研究計画を基に津田沼小学校の体育研究の方向性を周知する。

②自分の学年の担当領域の技を，自身や学年で教材研究する。その後，各領域主任を中心に各部会で審査会種目の技能ポイント，技を通して感じられる感覚，つまずき，補助や言葉かけなどの指導方法，系統性（学年間・技）のある周辺運動，発展技，組み合わせ技，身に付けさせたい感覚，指導上の留意事項，審査基準について実技と共に行う。

③【部会】

・授業実践は，特別支援教育，低学年，中学年，高学年のブロックで参観し合う。

・授業参観は，「参観の観点」を元に参観し，有効な手立てを検証する。参観の観点に焦点化した「授業参観シート」を活用する。また，研究のまとめを作成する際に活用できるように，研究の重点に合った場面の写真や動画を撮影する。
参観の観点…その時間に教師が一番意図していることは何か・発問の内容・手立ては有効か

・事後指導…授業者は，自身の指導観を元に授業を振り返り，部会講師から指導を受ける。
参観者は，「参観の観点」を元に自分の意見を述べたり「授業参観シート」を渡したりする。

（２）実践研究について

①授業研究を行う。

〇　６月　授業研究…指導案を作成し，めざす子どもの姿→仮説→副主題→主題に迫るための有効な手立てを検証する授業を行う。

〇１０月　公開研究会…６月の授業研究の成果と課題を受けて７・８月に公開研究会の指導案を作成し，公開研究会に臨む。

②授業を振り返りまとめる。

授業で講じた手立てを３つの検証方法を元に検証し，どのような手立てを講じることで，めざす子どもの姿→仮説→副主題→主題に迫ることができたのか，課題があったのかを考察する。

（３）実践研修について

①４月　体育指導における基礎基本…代表者授業を基に「学習規律・学習の流れ・言葉かけ」を学び合う。

・学習規律…集合，整列・話の聞き方（座る・腰を下ろす）・用具の準備，片付け・メリハリ

・学習の流れ…あいさつ→体つくり運動→器械運動の準備・体ならし→めあての確認→主運動→めあてに対する振り返り→片付け→健康観察

・言葉かけ…技能を伸ばす言葉・意欲を伸ばす言葉・安全に関わる言葉

②年度初めに，体育主任を中心に基本的な行動様式とそれらを行う意義を共有し，学校全体で規律正しい学習習慣が身に付くようにする。

③各学期始めや終わりに，領域主任を中心に器械運動審査会種目の技能ポイントや審査基準，補助の仕方，身に付けさせたい感覚について研修を行う。

内容：審査会種目の審査基準，技能ポイント，技を通して感じられる感覚，つまずき，補助や言葉かけなどの指導方法，系統性（学年間・技）のある周辺運動，発展技，組み合わせ技，指導上の留意事項，審査基準について研修する。

④ポイント授業による日常研修

例）授業規律がなかなか身に付かないので，見にきていただきたいです。

例）補助の仕方，言葉かけに困っている方は参考に見にきてください。

ホワイトボードに日時を記載し，日常の授業を見合っていく。

（４）児童の実態調査について

①情緒面と技能面の実態調査（単元前後）

情緒面…運動で満足感，達成感を感じるときはどのようなときか・課題解決に向けてどのように考えているか・関わりを生かすことができているか，などを問う。

技能面…主運動に到達するまでの周辺運動・主運動の実態

②思考の実態調査

・単元前に，主運動の技能ポイントについてどのようなことを知っているかや，課題解決に向かってどのような取り組みができるかを問う。

単元後にも同様の質問をし，単元前と比較してどれぐらい具体的になったかを検証する。

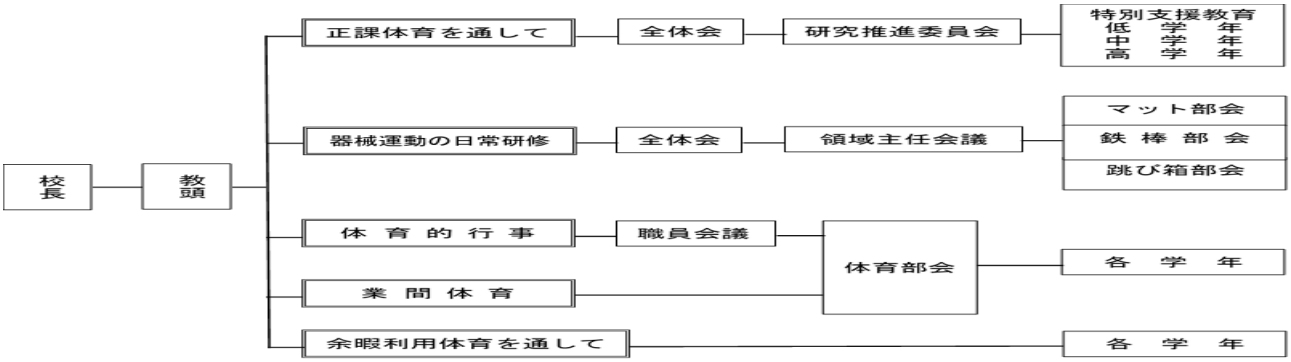
③一部形成的授業評価を参考にした意識調査

・成果，思考，関わりに特化した形成的授業評価を活用し，毎授業後に意識調査を行う。

２　研究組織

本校では，体育研究を学校教育の中核として進めていくため，下記のような組織を整え，全職員が心を一つにして研究に取り組んでいる。

＜研究組織図＞



上記の組織を基本に，児童や職員の実態を適切に把握し，研究計画に基づき組織的かつ計画的に研究活動の質の向上（カリキュラムマネジメント）を図っていきたい。

（１）「正課体育を通して」の組織について

①体育学習を通して課題に取り組む姿勢や意欲など，生涯教育の基礎をどのように培うかは，体育指導を通して解決していく課題である。本校では，生涯にわたって健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の基礎を培うために，次のような考え方で実践に取り組んでいる。まず，**正課体育において，児童は学び方を学び，成就感を味わい自信をもつ。**「学び方を学ぶ」

とは，その教材の学び方がわかり，自ら努力してできたという成就感に浸ることができることである。こうして**培われた自信が次のめあてへの意欲となり，進んで自らを高めたいという気持ちから生涯体育へつなげられる**と考えられる。

②各組織の役割は，全体会は研究の方針，計画の決定，研究推進委員会や各部会からの提案報告に関する検討と共通理解，授業研究の協議，講師からの指導等の場とする。

③研究推進委員会は，研究の方針，研究計画等の立案，決定，研究内容の検討，各部会活動の連絡・調整を行う。また，本校の特色ある教育活動の共通理解の場としている。

④特別支援教育・各学年の部会は，授業研究及を中心とした，児童の発達段階を見通しながらの累積的実践研究活動の場としている。

⑤特別支援教育・各学年の研究推進委員（領域主任を兼ねている場合もある）を部会責任者として置く。研究推進委員会には校長，教頭，教務主任，研究主任，体育主任及び各学年１名が所属し，研究主任や体育主任は研究推進委員を兼ねてもよい。ただし，研究主任は部会責任者を兼ねない。

（２）器械運動について

児童の健全な体の発達を考えると，学習指導要領に示されているどの運動領域も欠くことのできない内容である。そのことを十分に理解し，本校が研究の中核に器械運動を位置付け継続してきたのは，次のような理由がある。

〇器械運動は，自分の意志でいつでもできる運動であること

〇器械運動は，技能の段階が明らかなので児童自身が活動のめあてをもちやすいこと

〇自分の取り組み方で課題を克服し，できたという成就感を味わい自信をもつことができること

〇成就感を味わうまでのできない時期が続く過程では，教師と児童との試行錯誤，児童同士の教え合いや励まし合い，認め合う場面が数多くあり，そうした関わり合いが児童の大きな支えとなり，社会性を養い情緒の安定に結びつくと考えられること

〇成就感，自信，仲間との関わり合いが，次のめあてへの意欲やエネルギーとなる

〇能力開発には適切な時期がある。十歳位をピークにしている調整力を伸ばすための教材としてもふさわしいこと

（３）「体育的行事」の組織について

本組織で取り組む体育的行事は，下記の考え方で実践している。児童は正課体育において学び方を学び，成就感を味わい，培われた自信やエネルギーをもって自らを進んで高める。こうした児童の積極的な活動に，さらに意欲化と物事の焦点化を促すために，児童の積極的な体育学習を今以上に深め広める役割を果たしているのが，本校の体育的行事である。したがって，体育的行事の実施にあたっては次のような事柄に留意している。

①日々の学校生活に意欲と目標をもたせ，行事を通して達成感や成就感を味わわせることができるようにすること

②児童一人一人の粘り強い取り組みの跡を正しく認めることを通して，自己にとって最も効果的な学習方法を理解させること

③個人の進歩に合わせて，仲間の協力体制のあり方を正しく認めること

④認め方はなるべく具体的で，肯定的な自己評価につながるように言葉かけすること

（４）「業間体育」の組織について

体育を中核とした教育活動に取り組み始めた当初から続けている業間体育は，以下のような考え方で実践している。様々な運動に取り組むことで，児童の体力向上は勿論のこと，**学習で継続した緊張感から心身を開放させることによって，伸び伸びと気分転換をさせるための生活のリズムの一環として業間体育を日課に位置づけ，継続している。**児童が喜んで活動し，その活動を通して学校生活をより豊かなものにすると共に，体力の向上を図ろうとしている。これは，学習指導要領における「学校における体育・健康に関する指導を，児童の発達の段階を考慮して，学校の教育活動全体を通じて適切に行うことにより，健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努めること」という考え方とも合致している。

また，全校児童と全教師が一同に楽しく遊び，運動することを通してより人間関係を深める場としている。さらに，楽しい雰囲気の内にも安全で節度ある態度を身に付けさせ，集団行動様式の生活化を図ることなどもねらいとしている。

（５）部会講師

全体講師	日本体育大学　児童スポーツ教育学部　学長室長　大学院教育学研究科長	近藤　智靖　先生
特別支援教育	葛南教育事務所　指導主事	大澤　裕子　先生
低　学　年	八千代市立西高津小学校　校長	宗像　桂子　先生
中　学　年	習志野市立谷津小学校　校長	杉山　健一　先生
高　学　年	浦安市立高洲北小学校　教諭	藤平　隆信　先生

Ⅳ　１学期授業実践のまとめ　成果と課題

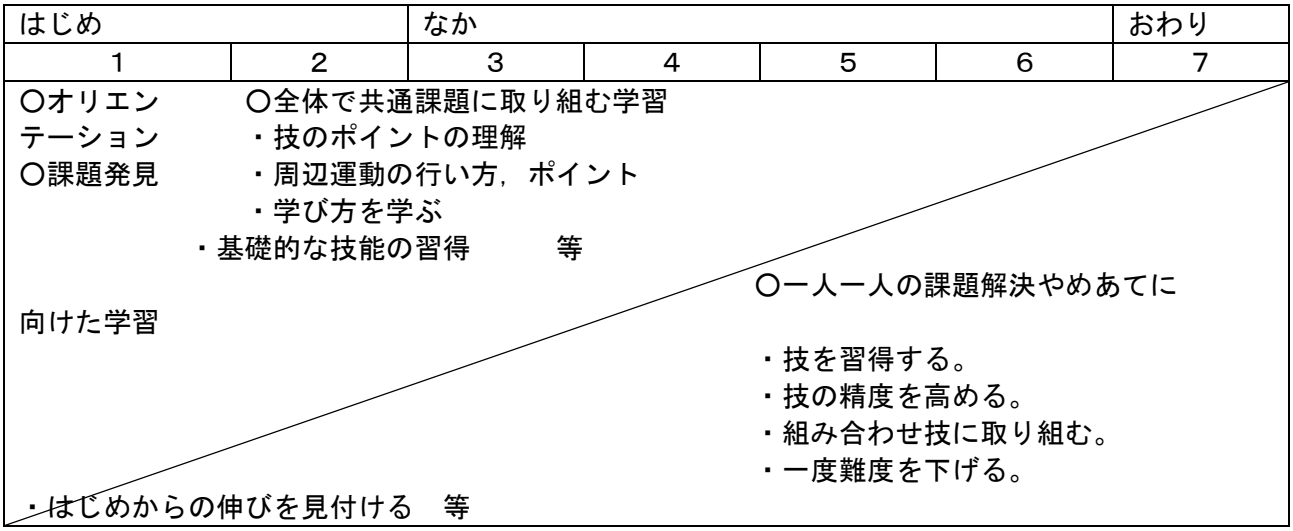
昨年度は，「技能向上につながる思考をはたらかせる学習」と「児童の様々な関わりが生まれる手立て」を重点において研究を進めてきた。前者では，発問を工夫して学習活動を明確にすることの重要性や，スモールステップ表などの支援方法の効果がわかり，後者では，児童の様々な関わりを生むためには，まずは教師の意図的な支援が重要であることがわかるなどの成果があった。一方で，児童一人一人に合った学習を展開できなかったり，児童の主体性に課題を感じたりするなどの課題もあった。そのため，より一人一人に合った学習活動や，児童の主体的な学びを支援することの必要性を感じた。そこで，今年度も学習指導要領「ア　目標の改善」にある，

課題を見付け，その解決に向けた学習過程を通して，心と体を一体と捉え，生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す。

を基にしながら，仮説として「児童一人一人がめざす姿に向かって活動ができるように単元計画を工夫し，課題解決につながる指導・支援を充実させたり，効果的な関わりを促したりする手立てを講じれば，自身のめざす姿に向かって自分で考えたり仲間と試行錯誤したりする力が身に付くだろう」を設定し，研究を進めてきた。また，仮説から以下の３つを重点として研究を進めてきた。

１．「単元計画の工夫」について

【単元計画のイメージ図（一例）】



【イメージ図の解説】

①「はじめ」は，全体で共通課題に取り組む時間が主の時間となる。オリエンテーションとして学習の約束や周辺運動のやり方を確認したり，全体でめざす技に対しての個人（グループ）の課題を見付けたりする時間とする。

②「なか」では，「はじめ」で学んだことや得たことを生かしながら，思考をはたらかせながら個人のめあてやめざす姿に向かって取り組む時間とする。技を習得する，高める，次の技に挑戦する，一度難度を下げる，……，といった一人一人に合った取り組みができるようにする。

③「おわり」では，今までの学習を振り返り，はじめの自分と比較して伸びを見付けたり，友達の伸びや頑張りを認めたりする時間とする。

（１）成果

・単元を「はじめ」「なか」「おわり」と，３つの過程に分けることで，それぞれの過程でどのような学習をするのか，明確に意図をもって授業を展開することができた。

・単元の「はじめ」では，学び方や扱う技のポイントなどを教師主導で全体で学んだり考えたりしたことで，基礎基本を高めたり技能差に関係なくみんなで考えを共有したりすることができた。

・単元の「なか」で課題解決学習を設定したことで，児童一人一人が自身のめざす姿に向かって学習に取り組む姿が多く見られた。

・単元の「おわり」ではじめの自分と比べたり友達と見合ったりすることで，自分や友達の伸びを感じることができた児童が多かった。

（２）課題

・主運動に意識をおきすぎて時間をかけた結果，その技を支える基礎的な動きや力を養うことへの意識が低くなってしまうことがあった。単元を通して，体ならしの運動や周辺運動の時間を大切にして，教師主導でたくさんやっていくことの重要性を感じた。

・単元前半は全体で，単元後半は個に合った学習を展開していったが，課題やめざす姿が実態に合っていなかったり，行き詰ったりしている児童の姿も散見された。それぞれの時間の中でも，より一人一人に合った学習過程を計画したり修正したりすることができる教師の力の必要性を痛感した。

・単元を通して，「思考に重きをおく時間」と「たくさん練習する時間」を意識して取り組んだが，バランスが難しかった。考えてばかりでは体を動かすことが醍醐味の体育学習のよさが消えてしまうし，何も考えずにただ練習してばかりでは「活動あって学びなし」となってしまう。「思考の時間」と「運動量の確保」のよりよいバランスを今後も追究していきたい。

２．「課題解決学習の指導・支援の充実」について

◎自分のめざす姿に向かうための課題解決学習の流れ

①主運動をやってみる。
②自分の実態を把握する。
③課題解決に向けて練習方法を選択したり，アドバイスを受けたりする。
④選択した方法，アドバイス等を元に様々な練習をしてみる。
⑤もう一度①と同じ運動をしてみる。
⑥実態を把握し，うまくいかなかった場合，課題解決のための方法や取り組むべき課題を修正する。うまくいった場合，質を高められるようにする。

＜課題解決学習の具体的な支援の手立て＞

学びの当事者は児童であり，教師は児童の学びの支援者・伴走者という立ち位置で，児童一人一人の学びをサポートする。指導や支援の方法は，以下のようなものが考えられる。

〇発問の工夫　〇スモールステップ表　〇フローチャート　〇技の系統表
〇場の設定　〇ヒントカード　〇技の連続図

（１）成果

・スモールステップ表やフローチャートなどの学習資料を提供することで，自らの学習に生かす児童の姿が多く見られた。

・多くの学習資料を提供したことで，ウェルビーイングにとって重要である自己選択・自己決定を促すことができた。

・学習資料や教材教具を準備したり，工夫したりして環境を整えることで，自然と思考したり関わったりする児童の姿が多く見られた。

・発問を工夫して学習活動を明確化することで，児童にとっては課題意識をもって学習に取り組みやすく，教師にとってはねらいにそった授業を展開することができた。

・試行錯誤しながら多くの学習資料を作成したことで，学校全体の財産となった。

（２）課題

・学習資料をうまく活用できずに，「なんとなく」「ただがむしゃらに」練習している児童の姿も少なからず見受けられた。児童が「自分の課題解決のために必要なものはなにか」と，必要感をもって学習に取り組めるような手立てが必要である。

・学習資料がうまく活用できていない場面も見られた。「これは何のためにあるのか」「どのように使えばよいのか」児童としっかりと確認する時間も設ける必要がある。

・自身の課題設定自体が適切でない児童も多く見られた。ただ目標に向かって突き進んでいくだけでなく，めざす姿や練習方法を修正したり変更したりするための学習資料も必要になってくる。

・「一つの技を習得するための課題解決学習」になってしまいがちだった。一つの技に向かって課題解決のサイクルを回していくことも大切だが，もっといろいろな技に取り組める環境づくりに取り組んでいきたい。

３．「効果的な関わりの促し」について

児童自身で必要な関わりを選択し，課題解決に生かせるように，児童が効果的な関わりをもてるように教師が促す。関わりを促す手立てとして，以下のようなことを意識して取り組んだ。

〇グルーピング　〇教師の介入　〇学び合いの仕方　〇器具・用具の選択

（１）成果

・学習のねらいにそったグルーピングをすることで，活発な学び合いにつながっている場面が多く見られた。

・教師が積極的に意識して肯定的なフィードバックをすることで，学習の雰囲気がとてもよくなり，児童同士の学び合いも活発化した。また，矯正的なフィードバックをすることで，児童の動きがよくなったり思考しやすくなったりした。

・教師が積極的に補助をすることで，運動の感覚がつかめたり，技ができるようになったりした児童も見られた。

・単元の前半で声掛けの仕方や補助のやり方など学び合いの仕方をおさえ，単元を通じて意識してフィードバックしていくことで，学び合いの素地ができたり高まったりすることにつながった。

・場や用具を複数用意して選択できるようにしたことで，自分の力量や目標に合わせて学習に取り組む児童の姿が多く見られた。

・友達同士で見合う場面を多く用意したことで，友達の動きに関心をもち，単元が進むにつれて児童同士の関わりが増えていった。

（２）課題

・教師一人一人の力量にまだまだ課題がある。児童の困り感や変化を見取る力や，それに対する手立てなど，一人一人の力量を高めていくことで，研究全体の底上げとなると考える。

・教師側があれもこれもと，児童の実態を考えずに関わりを求めすぎてしまうことがあった。発達段階に合わせて「これはめざしたい」という基準をつくることも効果的ではないかと考えた。例えば，低学年であるならば，「アドバイスし合う」というよりも，「回数を数え合う」「ハイタッチする」といった関わり方の方が適切なのではないかと考えられる。

・児童の「必要感」に合わせた関わりを提供できるようにしたい。児童の中には，「友達や先生に教えてもらいながらがんばりたい」と考える児童がいる一方で，「一人で黙々と練習したい」という思いの児童も必ずいるはずである。「こうしようね」ではなく，「この児童が求めている関わりは何か」を見取り，最適な関わりを促すことができるような支援策を考えていきたい。